

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話における「はい」と「ええ」の機能

著者	日向 茂男
雑誌名	研究報告集
巻	2
ページ	215-229
発行年	1980-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ； 65
URL	http://doi.org/10.15084/00001074

談話における「はい」と「ええ」の機能

日向 茂男

1. はじめに

この小論は、談話における「はい」と「ええ」の基本的な機能、役割、また、その機能上の相違について検討することを目的としている。「はい」と「ええ」それに「うん」は、相手の発話を受ける応答語である。ただ「はい」には他に呼びかけ語と考えるとよいような機能がある。また「はい」「ええ」は、「うん」とともに、あいづちや間投声として実際の談話に多用されるものである。

ここでは主として応答語としての「はい」「ええ」、それに呼びかけ語の「はい」が検討の対象になる。この論の目的は、二つの方向に向かっている。一つは「はい」「ええ」を考察することで、談話で呼びかけ語、あいづち、応答語等として機能している語を広く検討していくための糸口にすることであり、もう一つは、その成果を日本語教育教材の有効な活用、あるいは作成のための資料としていくことである。後者の問題をここにもち出すのはいささか唐突だが、これはここに用いた資料とも関係することなので後にまた触れる。

2. 「はい」「ええ」概観

呼びかけ語や応答語が品詞論的にどう扱われてきたかを文法論史の立場から整理し考察したものに、Miyake, Takeo の「感動詞と応答詞——副詞の体系(1)——」¹⁾、「信号詞と間投詞——副詞の体系(2)——」²⁾ 等がある。前者の論文で Miyake は、「はい・いいえ」の類を応答詞として感動詞から区別し、後者の論文で教室での出欠をとる際の応答語「はい」を信号詞として応答詞の「はい」から区別した。「はい」には少なくとも二つの機能があると

いうわけである。

このことは、Miyake のいう応答詞「はい」が相手、場面等によるあらたまりの程度によって「ええ」にも代り得るのに対し、信号詞の「はい」は「ええ」には代り得ないということからも納得のいくことである。「はい」には確かに応答詞から区別して信号詞と名付けてもよいような、応答として必ず「はい」になる場合があり、「ええ」とは違った面をみせている。

「はい」「ええ」に関するこうした問題を直接扱ったものに北川千里『はい』と『ええ』³⁾がある。北川は、ここで「はい」「ええ」を次のように定義づけている。

「(1)『はい』は相手の言ったこと、また伝えんとすることが、こちらにははっきり届いたということを敬意をもって表示するための応声である。

(2)『ええ』は相手の言ったことに対しての自分の気持の動きを表出する声であって、下降のイントネーションではっきり言い切る場合は『自分もそう思う』という気持を表出することになる。』⁴⁾

そして北川は、Miyake が信号詞とした教室での出欠をとる際の応答語「はい」についてそれが「ええ」では適切ではないのは、「例えば『田丸さん』と呼ばれて『自分もそう思う』と答えるのが不自然である事を言えば当然の事となろう。』⁵⁾と説明した。

「はい」は、相手の発話に対する敬意の伴う認知応答、「ええ」は、「自分の気持の動き」を基底とした相手の発話に対する同意応答、とする北川の考え方に筆者は基本的に同意するものである。応答語の第一義的な機能は、相手の発話を受けたという反応にあり、その反応のしかたに「はい」「ええ」について言えば北川の指摘するような相違があるのである。

「はい」は、基本的に認知応答として機能する語と考えられるが、ただ北川が物を手渡す際に言う「はい」や、命令文に対する応答語「はい」も同じ枠内で説明しようとしたことには無理があると思われる。物を手渡す際に言う「はい」は、呼びかけ語に共通する機能の中で考えた方がよいと思われる

し、また応答としての「はい」は、先行する発話の性質に応じて肯定、同意、賛成、了承といった意味を重ね合わせることも考慮しなくてはなるまい。

「ええ」は、相手の発話に応じているという姿勢を示し、その上で同意応答として機能することが多いが、更に「はい」と同様に、肯定、賛成、了承といった意味も重ねて表す。「ええ」にも応答の幾段階かがあるわけである。（「ええ」は、そのイントネーション等により、ためらい、疑問、驚き、怒り等の感情の様々なニュアンスを表すが、ここでは北川と同じく「下降のイントネーションではっきり言い切る場合」の「ええ」が考察の対象である。）

「はい」「ええ」にはまた、「うん」も加えて待遇度の問題が関係するから、談話場面に即しての検討も大事である。ただ習慣的に待遇度が「はい」に固定しているものもあることには注意しなくてはならないだろう。

3. 先行文・応接文

談話場面では何かしら先行する発話があり、それに応接する何かしらの発話がある。応接する発話のない場合にもそれをゼロ応接として考えてみるのが大事であろう。ここで極めて単純化したモデルとしてだが、談話の基本的な単位として先行する言い出しの発話とそれに応接する発話の組み合わせを設定し、それぞれ、先行文、応接文ということにする⁹⁾。

先行文については、ここでは細かな類別化の試みは避けて、一般的に (1) 感嘆文、(2) 平叙文、(3) 質問文、(4) 命令文（依頼文）と四分類するにとどめるが、その文がその性質上もともと持っている機能の問題⁷⁾とか、相手に対する働きかけの度合いの問題とかの検討が本来的には必要である。殊に文末の終助詞「ね」「よ」「わ」「な」等は、先行文がどう相手に働きかけたかの指標となる。

ただ個々の終助詞にも表現上その働きかけの度合いに幾段階かがあることを認めなくてはならないので問題は複雑である。たとえば永野賢は、終助詞「ね」に ① 軽い詠嘆の気持を含む判断、② 軽い主張、念を押す気持、

③ 同意を求める、返答を促す、④ 質問・詰問、の四段階を認めている⁹⁾。ここでは文末に「ね」を伴う文例を扱う時、①の段階と認めたものは感動文に、②は平叙文に、③は確認文（質問文の一種）に、④は質問文に、と便宜的に分けて扱った。

応接文は、応答語のみから成り立つこともあるし、また応答語のないこともあるが、そうした応接文一般の問題はここでは触れない⁹⁾。先行文に直接応じる応答語の第一の機能は、先に触れたとおり相手の発話を受けたという反応にある。このことは「はい」「ええ」の対極にある「いいえ」についても言えそうである。たとえば池上 禎造は、『はい』と『いいえ』¹⁰⁾で「イエエ」の前身「イヤ」「イエ」について「必ずしもはっきりした否定ではなく、相手の話を軽くうけとめるといった性質が強く、恐らくそれが本来のものではないかと思はれる。」¹¹⁾と述べている。このニュアンスは「いいえ」にも引きつがれているのではないかと思われる。

応答語の第一の機能を相手の発話に対する反応にあると考えるとすると、その反応のしかた、つまり「はい」「はあ」「ああ」等の反応の度合いにその第二の機能が認められる。それは、細かなニュアンスの違いで並ぶ応答語のバリエーションや個々の語のイントネーション等により表されるものである。ここには、あいまい、ためらい等の応答から、疑い、きき返し等、また否定的意味合いの応答までの幾段階かがある。

こうした応答語の第一、第二の機能に重なって相手の発話の意味、内容に関する肯定・否定、同意・不同意、賛成・反対、了承・拒否といったような論理的判断が必要に応じて表現される。これが応答語の第三の機能である。

先行文、応接文を一つの単位とすることには、先行文に対して応接文のないものとか、先行文に対するきき返し文とか、応接文に対する更なる応接文とかいうものをどう扱うか等の問題もあるが、それは別の機会に詳しく論じられなくてはなるまい。ここでは「はい」「ええ」の検討のため先行文、応接文という基本的単位の設定をしただけにとどめる。

4. 資 料

国立国語研究所の企画による日本語教育映画基礎篇のシナリオを「はい」「ええ」考察のための資料として用いた。これは、すでに述べたこの論の目的の二つの方向と関係している。一つは、平易な談話で構成されているこの日本語教育映画基礎篇が、呼びかけ語、あいづち、応答語等として用いられる語の基本的な機能、役割をみるのに適当であること、もう一つは、こうした考察で得られた成果を、直接的にはこの映画教材利用にあたっての有効な資料としていくことである。

資料とした日本語教育映画基礎篇は、次の通りである。カッコ内は略記号。例文として引用する時には、略記号で示す。

- 第一課 「これは かえるです」(かえる)
- 第二課 「さいふは どこにありますか」(さいふ)
- 第三課 「やすすくないです たかいです」(たかい)
- 第四課 「きりんは どこにいますか」(きりん)
- 第五課 「なにを しましたか」(なに)
- 第六課 「しずかなこうえんで」(こうえん)
- 第七課 「さあ、かぞえましょう」(かぞえ)
- 第八課 「どちらが すきですか」(どちら)
- 第九課 「かまくらをあるきます」(かまくら)
- 第十課 「もみじが とてもきれいでした」(もみじ)
- 第十一課 「きょうは あめがふっています」(あめ)
- 第十二課 「そうじは してありますか」(そうじ)
- 第十三課 「おみまいに いきませんか」(おみまい)
- 第十四課 「なみのおとが きこえてきます」(なみ)
- 第十五課 「きれいなさらに なりました」(さら)

他に、以下のシナリオから「はい」「ええ」の用例を拾い、補充した。

「男はつらいよ 寅次郎恋歌」(山田洋次・朝間義隆,『年間代表シナリ

オ集 '71』(男)

「忍ぶ川」(長谷部慶次・熊井啓,『年間代表シナリオ集 '72』)(川)

「日本沈没」(橋本忍,『年代表シナリオ '73』)(日本)

「華麗なる一族」(山田信夫,『年間代表シナリオ '74』)(一族)

「昭和枯れすすき」(新藤兼人,『年間代表シナリオ '75』)(昭和)

カッコ内の略記号については、日本語教育映画基礎篇の場合と同じ。

5. 「はい」「ええ」考察

5.1. 「はい」が先行文中に含まれる場合、あるいは先行文となる場合

ある発話が先行文であるかないかを示す一番大きな目印は、呼びかけ語の有無である。呼びかけ語は、談話の開始、あるいは展開の際に聞き手の注意を喚起するよう機能するもので、感嘆文を除くその他の発話の冒頭に現われるのが一般的である。「はい」にはこの呼びかけ語としての機能があり、「はい」に組み合わされる発話の機能との関係で大きく二つの役割を果たしていると思われる。

5.1.1. 「はい」を伴う先行文が提示文となる場合

これは、「はい」という呼びかけで話し手が聞き手の注意を喚起しつつ、ある事物、あるいはそれ相当の内容を提示して談話場面を開始したり展開したりしていくものである。

(1) (箱入りのケーキを差し出しながら)「はい、おみやげ。」 (そうじ)

北川の上記論文における物を手渡す際の「はい」は、この提示文に含まれるもので、事物提示が同時に手渡しという行動を伴っているものと言えよう。

こうした提示文においては、提示される事物が話し手、聞き手双方に文脈上明白な場合等は、「はい」だけになることも多い。

(2) (頼まれた書類を持ってきて)「はい。」 (なみ)

また相手に働きかける気持が強い場合には「はい、どうぞ。」とか単に「どうぞ。」ともなり得る。なお、次のような例もこの提示文の一種であると考

えられる。

- (3) (ある事物を提示して)「はい、これは何ですか。」 (創作例)

5.1.2. 「はい」を伴う先行文が行動指示文となる場合

これは、「はい」という呼びかけで話し手が聞き手の注意を喚起しつつ、聞き手にある行動をとるよう促したり、指示したりすることで談話場面を開始、あるいは展開していくものである。

- (4) (映画の開始にあたって)「はい、スタート。」 (かぞえ)

- (5) (看護婦が病人に)「はい、体温を計って。」 (おみまい)

(4)(5)とも聞き手に指示、あるいは要求する行動が文脈上明らかな場合等は「はい」だけになることもあり、行動を促す度合いが強くなると「はい」に代って「さあ」が用いられるりする。

以上みたとおり「はい」は、先行文中に現れることで、呼びかけ語である「どうぞ」や「さあ」に通じる積極的な機能を果たし、談話場面の成立、維持に関与するが、「ええ」にはこうした機能がない。「ええ」は、そうした積極性を欠き、もっぱら応接文において談話の流れに即しながら相手の発話に応じているという姿勢を示すところに基本的な機能がある。

また「はあ」のようなあいまいさやためらいのある語もこうした先行文中の「はい」に代って用いられることはない。

なお、上記(1)～(5)の例文では応接文を省いたが、それは先行文中における「はい」だけをここで問題にしたためである。

5.2. 「はい」「ええ」が応接文中に含まれる場合、あるいは応接文となる場合

ここではどのような性質を持つ先行文に応接文中の「はい」「ええ」がどのような機能で応じるかを検討していく。先行文が、感嘆文、平叙文、疑問文、命令文(依頼文)である順にみていく。

5.2.1. 先行文が感嘆文である場合

感嘆文が先行文となる場合、その文の性質上応接文が現れないのが一般的である。つまり感嘆文は、聞き手への働きかけのないもの、あるいは極めて

弱いものである¹²⁾。ここでは感嘆文の範囲を幾らか広く、モノローグ的表現や感動的表現まで含めて考えてみることにする。

(6) (隣室のステレオのボリュームを下げてもらって)「ああ、静かになった。」
(さら)

(7) (乗りたかったバスが行ってしまって)「困ったなー。」
(なみ)

(6)(7)とも聞き手を予想しないモノローグ的表現であるが、そこに聞き手がいあわせて同じ利害関係の立場にあり、談話場面を共有すれば、

(6)' 「ええ、静かになりましたね。」

(7)' 「ええ、困りましたね。」

と応じることもできる。(6)'(7)'の「ええ」に代って「はい」で応じることは、どうであろうか。その場合は相手の発話に自然に応じた以上の特別のニュアンスが加わるようである。「はい」は、あらたまりを伴った、つまり相手の発話に対する緊張を伴った認知応答であるため、よそよそしい、あるいは大げさに言う印象がそこに生まれるようである。話し手、聞き手双方に共有された談話場面での共鳴的応答としては「ええ」がふさわしい。

(8) a 「きれいですね。」

b 「ええ、きれいですね。」
(こうえん)

(8)aは、感動的表現、あるいはある現象に対する自分の反応を聞き手に伝えようとする表現である。話材となる事物は、話し手、聞き手双方に明白であり、談話場面は共有されている。こうした場合共鳴的応答として(8)bの「ええ」が生まれてくる。他に、(8)aの文末の終助詞「ね」が応答として「ええ」を招きやすいことも考慮しなくてはなるまい。

5.2.2 先行文が平叙文である場合

平叙文と呼ばれるものは、範囲が広い。平叙文は、その表現意図に即して幾つかの範疇に分類された方がよいものである。ただここでは応答としての「はい」「ええ」の表れの相違、あるいは片寄りによって、先行文としての平叙文を考える。

(9) a 「ずいぶん歩いちゃったね。」

b 「ええ。」
(川)

これは、話し手、聞き手に共有された談話場面での両者に共通の現象を話題にしていることと、その先行文の文末が「ね」であることで(8)に似た例である。ただ(9) aは、(8) aのような感動表白の色彩が薄く、ある現象をそのまま述べているため、(9) bは、共鳴的応答というより同意応答となっている。

(8)(9)は、文の分類としてはどう取り扱われるべきであろうか。筆者は、先に永野賢による終助詞「ね」の四分類のうち②の段階にあると思われるものは、平叙文として扱うとしたが、やはり疑問の残るところである。文末の「ね」のみに注目すれば、たとえば時枝誠記は、「対人関係を構成する助詞・助動詞」¹³⁾で「ね」を伴う表現について「聞き手を常にある間隔に置こうとする敬語的表現とは表裏をなすことは明らかで、聞き手との親しい関係においてのみ許される。」¹⁴⁾と説明している。つまり待遇上「ね」を伴う先行文には「はい」よりも「ええ」による応答が現れやすいのである。ただこれには話材や談話場面も大きく関係することは、上に述べた通りである。

- (10) a (女子事務員) (部屋を出ていく際に)「あのう、ちょっと郵便局まで行って来ます。」
b (男子事務員)「はい。」 (創作例)

さて、(10) aのようなある情報を伝達する文に対しては、「ええ」で応答せず、話し手の情報を認知したと「はい」で応答するのが一般的である。(10) aは、談話の開始、あるいは展開の際に現れ、それまでとは異質の話材を提供している。(10) bの応答により談話場面は共有されることになり、場合によっては談話が持続することになる。

(9) a, (10) aの文の性格、またその談話場面と話材、そしてそれに応じる(9) b, (10) bの同意応答としての「ええ」、相手の発話を認知したと応答する「はい」が、「はい」「ええ」の機能を基本的に表しているようである。(10) aを「ええ」で応じることは一般的ではないと思われるが、あいまいに応じる場合等は「はあ」「ああ」等が現れるようである。

なお、平叙文には、あいさつ、おわび、お礼といったある種の明瞭な意図を持った表現がある。こうした表現が先行文となる場合の取り扱いには、「い

いえ」等も含めた広い視点からの検討が必要である。たとえばお礼やおわびの表現である先行文には否定的に応じるのが普通である。

(11) a 「ほんとうにありがとうございました。」

b 「いいえ。」 (もみじ)

(11)bのような「いいえ」を単に否定的応答であるとするには、先に触れたとおり問題があるところであり、応答語全体の性格の中での検討を要する。たとえば水谷修は、この種の「いいえ」を「言われた本人自身のへりくだり、謙虚さを示す」¹⁰⁾表現として扱っている。このことについては別に論じなくてはなるまい。

5.2.3. 先行文が質問文である場合

質問文に対する応答「はい」「ええ」それに「うん」は、「はい、そうです。」という意味の肯定応答であると基本的に言えよう。この場合「はい」「ええ」「うん」は、相手、場面等により待遇的に使い分けられる。

(12) a 「掃除は終わりましたか。」

b 「はい／ええ／うん。」 (そうじ)

これは、質問文の一種である文末に「ね」を伴う確認文等の場合でも同じである。

(13) a 「今日はスペイン料理ですね。」

b 「はい／ええ／うん。」 (一族)

(14) a 「すぐ出かけるでしょう？」

b 「はい／ええ／うん。」 (男)

しかし「どこ」「いくら」等の疑問詞を伴う質問文に対し「はい」と応じる場合は、相手の質問を確かに聞いたという意味の認知応答である。

(15) a 「私のかばんはどこですか。」

b 「はい、あそこです。」 (かえる)

こうした疑問詞を伴う質問文に「はい」に代わって「ええ」で応じるのは一般的でないと言えよう。これは、応答語としての「ええ」の性格から考えて納得のいくことである。ただ同じ疑問詞を伴う質問文であっても「どう」「いかが」を含む質問文に対する応答では、少し事情が違っている。

(16) a 「ジュースはいかがですか。」

b 「ええ。」

(こうえん)

(16) a では、話し手が聞き手の気持、意向を問うている。そのためか談話の流れに即して相手の発話に応じている自分の姿勢を示してまず「ええ」と応じるようである。この「ええ」はあらたまりの程度が高ければ、相手の発話に対する認知応答である「はい」にもなり得る。

5.2.4. 先行文が命令文である場合

命令文に対する応答「はい」「ええ」それに「うん」は、「はい、わかりました。」という意味の了承応答であると基本的に言えよう。命令文は、聞き手の応答、また実際の行動を求めるものであるが、聞き手にはっきり行動を求める命令的なものから聞き手の行動に期待するような依頼文までの幾つかの段階がある。そして聞き手の気持、意向をあまり問題にせず、いわば絶対的に命令する発話の応答には「ええ」は現れにくく、聞き手の気持、意向にそって依頼するような発話には「はい」「ええ」「うん」が待遇差を伴って使い分けられるようである。これは、「はい」「ええ」の基本的な性格から考えても納得のいくことである。

(17) a 「ちょっと待ちな。」

b 「はい。」 (男)

(18) a 「シャワーを浴びて、着がえておいで。」

b 「はい／ええ／うん。」

(一族)

ただ命令文に対する応答が習慣的に待遇上「はい」に固定しているものもある。

(19) a (客)「これを下さい。」

b (店員)「はい、かしこまりました。」

(おみまい)

なお、相手に誘いかける勧誘文に対する応答「はい」「ええ」「うん」は、「はい、そうしましょう。」という意味の賛意応答であり、この場合も「はい」「ええ」「うん」が待遇差を伴って使い分けられる。

(20) a 「ちょっと海を見に行きませんか。」

b 「はい／ええ／うん。」

(なみ)

5.2.5. 先行文が呼びかけ語のみからなりたつ場合

以上みてきた先行文には感嘆文を除いて呼びかけ語が伴うことがある。相手に対する働きかけが強くなった場合、まず呼びかけ語で相手の注意を喚起し、談話場面を開始、あるいは展開していくのである。ここで特に先行文が呼びかけ語のみからなりたつ場合の応答について検討してみる。

(21) a (訪問者)「すみません。」

b (事務員)「はい。」 (なみ)

(21) a は、「あのう」や「もしもし」に代表されるものだが、必ずしも言語表現である必要はない。

(22) a (ドアをノックする音。)

b 「はい。」 (なみ)

(21) a, (22) a の談話場面を成立させようとする呼びかけ表現に対し、(21) b, (22) b の応答は、それに応じる用意のあることを示している。つまりこの応答で話し手、聞き手が共通の談話場面に入ることになる。この「はい」による応答を「ええ」に代えることはできない。すでに述べたとおり「ええ」には談話場面の成立に関与するような積極的機能はないからである。「はあ」等の応答で応じることはできるが、その場合は先行文としての呼びかけ表現を十分受けとめていず、談話開始に応じる姿勢が十分成立していない。

先に触れた Miyake が特に信号詞とした教室で出欠をとる際の呼びかけ、応答は、(21)のようなものが形式化した例と考えられよう。

6. おわりに

以上、談話の基本的単位として先行文と応接文の組み合わせを考え、先行文中における「はい」の機能、また先行文の持つ性質等に応じての応接文中の「はい」「ええ」について簡単な検討を進めてきた。ここでは、呼びかけ語としてまた認知応答として「はい」が果たしえる機能に「ええ」が代わり得ない場合等に触れながら、「はい」「ええ」の基本的機能に言及するにとどまった。

本来的には、「はい」「ええ」が重なりあって用いられる場合、つまり相手、場面等により待遇的に使い分けられる場合の検討にまで進む必要があった。そうした実際をみるためには、社会言語学的なある種の調査が必要である。次の課題である。

また「はい」「ええ」それに「うん」を加えての全体像を考えるためには、実際の談話でそれらが応答語としての他にあいづちや間投声としてどう機能しているか、生の録音資料等を基にして分析してみる必要がある。あいづち、間投声としての「はい」「ええ」の方がむしろ「はい」「ええ」の本質的な機能を「うん」とともに表しているかもしれないのである。これも次の課題である。

先行文、応接文による談話の単位の設定については、今後呼びかけ語、応答語を考えていく上での基本的単位としたい。ここでは先行文の類別化に十分進むこともできず、また応接文については応答語として「はい」「ええ」が現れるものだけに触れた。先行文、応接文それぞれについて、またその組み合わせについて更に検討を加えながら、個々の呼びかけ語や応答語の果す機能、役割を明らかにしていきたい。

<注>

- (1) 1959 6, 「実践国語教育」, vol. 20, no. 225, 実践国語教育研究所, pp. 100～102
- (2) 1959 7, 「実践国語教育」, vol. 20, no. 226, 実践国語教育研究所, pp. 68～71
- (3) 1977 7, 「日本語教育」33号, 日本語教育学会 pp. 65～72
- (4) 上記(3)論文 p. 66
- (5) 上記(3)論文 p. 67
- (6) 談話の単位を論じたものに「会話単位・言語主体・文の階層性」(宮地裕, 1971, 『文論』, 明治書院, pp. 54～71)がある。宮地はここで「対談」「対話」「発言」といった単位を設定している。
- (7) 文の性質全般を論じたものに、「対話——戯曲のことば——」(阪倉篤義, 1954 3, 「国語国文」243号, 第23巻第11号, 京都大学国文学会, pp. 12～22), 「いわゆる『文の性質上の種類』の原理とその発展」(宮地裕, 1954 3, 「国語国文」

243号, 第21巻第2号, 京都大学国文学会, pp. 23~34) 等がある。なお, 前者論文は『文章と表現』(阪倉篤義, 1975, 角川書店)に, 後者論文は上記(6)の『文論』に収められている。

- (8) 1951, 永野賢, 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』(国立国語研究所報告3), 国立国語研究所, p. 152
- (9) ここで応接文としたもの全般を論じたものに「うけこたへ」(宮地敦子, 1959, 「国語学」39, 国語学会, pp. 85~98)がある。ここで宮地は「前詞」(ほぼ, 先行文にあたるもの)に対しての「くうけこたへ」の態度の型」(ほぼ, 応接文)として「(A)黙 (B)応 (C)転 (D)断」の四つをあげている。
- (10) 1952, 「国語国文」217号, 第21巻第8号, 京都大学国文学会, pp. 55~58
- (11) 上記(10)論文 p. 56
- (12) 上記(7)の阪倉論文では, 咏嘆の発話(感嘆文)を「聞き手を予定しない」「非伝達的発話」として他の「伝達的発話」と対立させている。
- (13) 1951, 「国語国文」209号, 第20巻第9号, 京都大学国文学会 pp. 1~10
- (14) 上記(13)論文 p. 8
- (15) 1979, 『日本語の生態』, 創拓社, p. 107

また上記(10)論文で池上禎造は, 「西洋の no のようなはっきりした否定の要素を日本語の応答詞はもっていない。」(p. 58)と述べている。

<参考文献>

- 大石初太郎・南不二男, 1963, 「これまでの文型研究」, 『話しことばの文型(2)』(国立国語研究所報告23), 国立国語研究所
- 池上禎造, 1952, 「『はい』と『いいえ』」, 「国語国文」217号, 21巻第8号, 京都大学国文学会
- 市川 孝, 1967, 『口語文法』, 筑摩書房
- 北川千里, 1977, 「『はい』と『えゝ』」, 「日本語教育」33号, 日本語教育学会
- 久野 暲, 1973, 「『ハイ』と『イエ』」, 『日本文法研究』, 大修館
- 阪倉篤義, 1954, 「『対話』——戯曲のことば——」, 「国語国文」243号, 第23巻第11号, 京都大学国文学会
- , 1975, 『文章と表現』, 角川書店
- サクマ カナエ, 1954, 「発言の場・話題の場・課題の場」, 「国語国文」243号, 第23巻第11号, 京都大学国文学会
- 進藤正邦, 1954, 「『場』による『文』の分類について」, 「山口女子短期大学研究報告」第3号, 山口女子短期大学
- 鈴木一彦, 1967, 「『感動詞』とは何か」, 『日本文法本質論』, 明治書院
- 鈴木一彦・林 巨樹(編), 1973, 『品詞別日本文法講座6 接統詞・感動詞』, 明治

書院

時枝誠記, 1951, 「対人関係を構成する助詞・助動詞」, 「国語国文」209号, 第20巻第9号, 京都大学国文学会

永野 賢, 1951, 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』(国立国語研究所報告3), 国立国語研究所

水谷 修, 1979, 『日本語の生態』, 創拓社

Miyake, Takeo, 1956, 「感動詞と応答詞」, 「実践国語教育」6月号, vol. 20, No. 225, 実践国語教育研究所

——, 1956, 「信号詞と問投詞」, 「実践国語教育」7月号, vol. 20, no. 226, 実践国語教育研究所

——, 1961, 「あいさつ語の文法」, 「実践国語教育」5月号, vol. 22, no. 250, 実践国語教育研究所

宮地敦子, 1959, 「うけこたへ」, 「国語学」, 39, 国語学会

宮地 裕, 1954, 「いわゆる『文の性質上の分類』の原理とその発展」, 「国語国文」243号, 第23巻第11号, 京都大学国文学会

——, 1971, 『文論』, 明治書院

森岡健二, 1973, 「文章展開と 接統詞・感動詞」, 『品詞別日本文法講座6 接統詞・感動詞』, 明治書院

森重 敏, 1952, 「応答詞とその分化」, 「国語国文」211号, 第21巻第2号, 京都大学国文学会

——, 1959, 『日本文法通論』, 風間書房

森田良行, 1973, 「感動詞の変遷」, 『品詞別日本文法講座6 接統詞・感動詞』, 明治書院